



衛生管理されたキャンプ内の工場で、雇用されたシリア難民がパンを製造



レバノンにシリア難民への越冬・食糧支援を開始

ベイルートとダマスカスの中間地点であるレバノン・ベカー県シウトウーラの路上には名物のラブネ（ヤギ乳チーズのオリブオイル漬）や蜂蜜を売る土産店やカフェが並んでいます。以前はシリア・レバノン国境を越える人びとで賑わっていましたが今は旅行者の姿はなく、郊外にはシリア難民がテントやカラバンで暮らしており、ベカー県にはレバノンにいるシリア難民の65%が集中しています。

レバノン山脈とアンチレバノン山脈に挟まれたベカー県の標高は900メートルで、冬は厳しい寒さに見舞われます。その寒さができるだけ和らげ、食糧が不足した人びとの生活をサポートできるように、パルシツクでは今年も10月から食糧・越冬支援として、ベカー県内の3か所の難民キャンプの住民331世帯に米や豆等28品目を詰めた食糧バスケットを配布し、寒さの厳しい12〜2月には灯油ストーブ用燃料を配布します。

今年には更に、協力団体であるレバノンのNGO、URDA（Union of Relief and Development Associations）が運営するキャンプ内のパン工場で製造したパンも配布します。工場で働くのは難民キャンプの住民です。小麦粉、砂糖、イーストを混ぜた掌サイズのパン生地はプレスを経て窯に運ばれ、フカフカに焼きあがり袋詰めされます。レバノンのシリア難民は就業機会に恵まれていません。パン工場での勤務を通じて現金収入を得ると共に、働く意欲やスキルを伸ばし、今後の就業機会に生かせるようにと、難民の未来を考えています。（岡崎、白井）

（この事業はジャパン・プラットフォームの助成と、皆様からのご寄付で実施しています。）
 （1）世界食糧計画（WFP）2016年の調査によると、シリア難民世帯の93%は十分な食糧を手でできていない。
 （2）レバノンのシリア難民は頻りに居住地からの退去を強いられ、滞在許可証が更新できなかったりするために就業が困難であり、VASYR 2016の調査では、シリア難民の貧困層は49%（2014年）から、71%（2016年）に増加している。

レバノン	シリア難民への越冬・食糧支援を開始…… 1	ティフ県	淡水池での養殖および漁協の強化事業終了…… 5
シリア難民	レバノン 教育センター10月に開校!…… 2	東ティモール	コーヒー、過去15年で最も不作の年…… 6
	トルコ シリア難民支援 7年目の現実…… 2	スリランカ	南部 洪水・土砂崩れ緊急支援事業…… 6
パレスチナ	ガザ 農業の慢性的な課題に取り組む/西岸 生	マレーシア	ペナンでの教育事業を拡充…… 6
	ごみ堆肥化の仕組みづくり、試行錯誤…… 3	フェアトレード	「アールグレイ紅茶」有機認証取得、「ルフナ紅茶」も新登場/
東ティモール	上水システム・小規模灌漑用ため池を造成/「アロ		産地からのメッセージを商品に同封/ちょっと寄り道! 美味しいお店…… 7
	マ・ティモール」次なるステップへ!…… 4	パルシツクからのお知らせ	認定NPO法人格を取得しました!/個人による寄
スリランカ	サリー事業 新メンバーとともに事業拡大中/ムライ		付で受けられる控除について/ご支援のお願い…… 8

レバノン 教育センター10月に開校！

多くのシリア人難民キャンプがあるベカー県バール・エリアス市では、レバノン教育省によるシリア難民の子どもたちの公立学校への受け入れ体制がまだまだ追いついておらず、学校に行けないシリア人の子どもたちが多くいます。何よりもまず子どもたちに読み書きが出来るようになってもらいたい、というのがお父さんお母さん、周りの大人たちの願いです。そのような中、パルシックがSawa for Development & AidというレバノンのNGOと協力しながら実施している教育事業により、待望の教育センターが開校しました。開校初日は普段の生活とは違う空間で、緊張と興奮の混ざった面持ちの子どもたちでしたが、休憩時間ともなるとあり余るエネルギーを発散させ、楽しそうに中庭を走り回る様子が見られました。

(岡崎、宮越)

(この事業はジャパン・プラットフォームの助成と、皆様からのご寄付で実施しています。)



先生から授業中の決まりごとを教わる生徒たち



トルコでのシリア難民7年目の現実 〜食糧・生活用品支援／子どもの教育支援〜

トルコでは未だ300万人のシリア人が避難生活を送っています。パルシックの活動地であるシャンルウルファ県では、10月から綿花の収穫時期となり、シリア人世帯は家族総出で収穫に従事しています。家族とともに働く子どもたちに「学校」について尋ねてみると、「学校って何？ 学校に行くとお金もらえる？ 綿花はお金になるよ」と話していました。支援機関から食糧・生活支援を受けていても、未だ最低限の生活水準にとどまり、学齢期の子どもたちでさえ家族と共に働かざるをえない状況が続いています。

トルコにおいて特に脆弱性の高いシリア難民100万人に食糧を届けることを目的として、欧州委員会人道援助・市民保護総局（ECHO）が食糧・生活支援を開始してから1年ほどが経ちますが、シャンルウルファ県の農村地帯でこの支援を受けている世帯は60%強にとどまっています。この支援を受けるには難民登録がなされ、身分証明書を取得していることが条件

綿花の収穫に勤しむシリア人の子どもたち



となつていきますが、テントやシェルターに居住し正規の住所を提出できない世帯は、ECHOによる支援を申請できません。パルシックではこの支援を受け

ていない世帯に対し食糧・生活用品の支援を実施しています。

教育を受ける機会がないシリア難民の子どもたちに、4月から子どもの居場所（チャイルド・フレンドリー・スペース・CFS）を提供しています。CFSでは農村に点々と散らばる、子どもたちがいる地域へ週1回訪れ、小さなペースを借りてアラビア語の読み書きや算数の学習、遊びを通じた心理社会的ケアを実施します。

教育支援の普及に努めているトルコ政府ですが、遠隔地の村々では未だ就学機会を得られない子どもたちや、トルコ語による学校教育への順応が難しい子どもたちがいます。やむを得ず家族と畑で働く子どもたちも、私たちが訪問している時間は学習と遊びに専念しています。また、多くの子どもたちがシリアでの戦争の記憶やトルコでの適応困難からストレスを抱え、子どもが子どもらしく安心して伸び伸びと時間を過ごすことができいません。

定期的な学習・遊びにより家族との関係づくりも促進され、約6ヶ月間の活動で、自尊心やコミュニケーションスキルを身につけた子どもたちの笑顔が見られるようになりました。

(大野木、高田)

(この事業はジャパン・プラットフォームの助成と、皆様からのご寄付で実施しています。)



子どもたちが暮らす村に訪問し、学習や遊びを提供

■ガザ 農業の慢性的な課題に取り組む

小規模農家の生計をサポートするため、ガザ地区の農業の、喫緊かつ慢性的課題の1つである農業用水の問題に2017年6月から取り組んでいます。ガザの主な水源は地下の帯水層（淡水）ですが、近年、①生活排水による汚染、②汲み上げ過ぎによる枯渇、③海水の浸入による塩分濃度上昇、などが大きな問題となっています。特にハン・ユニス東部やラファ東部などの南東部では、塩害に強い限られた作物しか育てられない、地下帯水層が枯渇しかけて井戸が掘れず、ラファ西部からパイプで長距離輸送した高価な水を購入せざるを得ないなど、深刻な影響を及ぼしています。この状況にあつて、雨期（10月～4月）に得られる雨水は貴重な淡水源。農家は伝統的な簡易貯水池を使って雨水を利用していますが、



家族を支えるイブラヒムさん



十分な量は確保できません。この事業では農業用温室の屋根を利用して効率的に雨水を集め、複数の農家が共同利用する貯水池に水を貯めて使用する仕組みを導入します。

9月、兄弟で農業を営むイブラヒムさんを訪ねました。地域の地下水は塩分濃度が高すぎるため、遠くラファ地区西部から引いた水を購入していますが、それでもまだ塩分濃度が高いと言います。手掘りで簡易貯水池を作って雨水を集めていましたが、水が流出してしまうなど苦労していました。「私の家族には、私たち兄弟の農業収入しかないのです。このシステムの導入で一家みんなが楽になります」と言うイブラヒムさんは、40人もの家族を支えています。（盛田）

（この事業はジャパン・プラットフォームの助成と、皆様からのご寄付で実施しています。）

■西岸 生ごみ堆肥化の仕組みづくり、試行錯誤

西岸での循環型社会づくり事業は、今年で2年目を迎えます。簡易堆肥舎を建て、50軒の家庭から回収した生ごみで堆肥を作るといふ、生ごみ堆肥化の仕組みづくりに取り組んでいます。9月上旬、有機農家であり日本の国内外で生ごみ堆肥化の技術支援を行う橋本力男さんを現地にお招きし、指導を受けました。

生ごみから良い堆肥を作るための一番のポイントは「生ごみを腐らせない」と。事業では生ごみの腐敗を防ぎ、水分を減らして発酵を促すため、オリーブの搾りかすや鶏糞など地域の有機ごみから作った発酵副資材（床材）を生ごみ分別ボックスの中に一緒に入れて保管しています。「生ごみの一次処理」を各家庭で実践しています。

橋本さんと各家庭を回り、一次処理状況をモニタリングしました。ナフェズさんの家では、以前、煙草の吸殻が生ごみに混入していましたが今回は見られず、代わりに庭の乾いた草花を入れていました。他の家庭でも、干した野菜の皮や落ち葉を入れるなど生ごみの水分量を減らす工夫が見られました。

これまでの一次処理の最大の課題は床材の不足でした。床材の主材料であるオリーブの搾りかすは通常10～11月に発生

生ごみ堆肥化の要、床材づくりの実習の様子



しますが、昨年のオリーブ収穫から1年が経つこの時期、暖房の燃料として各家庭に備蓄されていたものも底をついて、十分な量の床材を各家庭に配れずには10月中旬から。今年オリーブの搾油所から直接必要量を手しよう、と話合いました。（廣本）

（この事業は地球環境基金と、皆様からのご寄付で実施しています。）

■上水システム・小規模灌漑用ため池を造成

2015年10月より、3か年計画で東ティモールのマウベシ郡内の山岳地帯において、水利改善事業を行っています。2年次にあたる今年は、5集落で上水システム、また2集落で小規模灌漑用のため池の造成を実施しています。

上水システムは水源から水を引き、大小の貯水槽を造り、その貯水槽をパイプでつないで集落へ水を供給します。基本的には地形の高低差を利用し水を上から下に流すのですが、水源から高地を挟んで集落がある場合、揚水ポンプを用いて水を引き上げる必要があります。各現場にはパルシックのスタッフが2人ずつ泊まり込んで作業にあたっています。今年



集落の人たちも大勢参加した貯水槽建設の作業現場

を立てて自主的に作業を進めていくスタッフたちは頼もしい限りです。

ため池は、アイトウトウ村ハトゥプテイ集落で4基の造成を完了し、各々のため池をパイプでつなぐ工事も終えました。リタ集落では現在2基目を造成中です。先日、現地に招いたパーマカルチャーの指導者であるエゴ・レモス氏は、ため池の灌漑利用のほか、魚の養殖も推奨しています。大きな魅力と可能性を持つため池に、村人たちのモチベーションも上がっています。

(この事業は日本NGO連携無償資金協力のお成と、皆様からのご寄付で実施しています。)

住民の声

フランシスコ・テ・アラウジョ・パレトさん
(アイトウトウ村アイカラウ集落)



水は私たちの生活に欠かせません。飲み水や料理にはもちろん、水浴びやトイレ、野菜を育てる際にも水は必要です。そのため今は、家族総出で1日に

だいたい6回水汲みをしています。1回の水汲みでは一人につき5リットルのポリタンクを4個、合計20リットルを1時間以上かけて運びます。家の近くに公共の水場ができれば、水汲みはずっと楽になります。生活がかかっているのです、私は水管理委員会にも立候補し、現場にも毎日出ています。

■「アロマ・ティモール」次なるステップへ!

東ティモールの女性たちが生産する商品の統一ブランド「アロマ・ティモール」のお披露目から早1年。ピクルスやパイヤジャム、タマリンドキャンディーなどの新商品も加わり、商品ラインアップも今や29種類に増えました。相変わらず安定しない品質の管理や気候変動による原料調達の高騰など、改善と柔軟な対応が常に必要とされます。首都デイルのスーパーマーケットには、専用棚を置かせてくれるところもあり、今後は販売促進のためのポスター広告やSNSでの広報にも力を入れていきます。

そして今年度から、デイルで品質・在庫管理およびマーケティングを担当する人材の育成と、各地域での集荷システム

スタッフ紹介

マルタ・グスマオ(マーケティング担当)

新たなスタッフとして加わったマルタはバウカウ県ラガ出身、6カ月の赤ちゃんを抱えるお母さん。小さい体ですが豪快によく笑います。9月にはデイル市内のレストラン「アゴラ・フード・スタジオ」でインターンとして、なぜ地元産品の促進が重要なのか、なぜ化学調味料を使わないのか、などの理論から、商品のプロモーション方法、仕事に対する姿勢や接客の方法についての研修を1週間受けました。今後も実務研修で新たなスキルとタスクへの挑戦が続きます。



現地スーパーマーケットの「アロマ・ティモール」コーナー



マルタ(左)とアゴラ・フード・スタジオのマークさん(右)

構築に向けての具体的な連携を始めています。残り1年となったこの事業、女性たちとともに次のステップへ向けて新たな動きを創り出しています。(林知美)

(この事業はJICA草の根技術協力事業のご支援と、皆様からのご寄付で実施しています。)

■サリー事業 新メンバーとともに事業拡大中

スリランカ北部の女性たちが、南部の女性たちからご寄付いただいた古着サリーをバッグや衣類にリメイクして販売するリサイクル・サリー事業を実施しています。

今年新たにサリー事業に参加したムライティブのグループ、タンニムリプ村の女性たちが縫製のトレーニングを始め、8か月が経ちました。20代の若い母親が多いこのグループ。23人のメンバーのうちほとんどが縫製の経験がなく、パルシックスタッフだけでは講師が足りず、グループ分けをして経験者が他のメンバーに教える形でのトレーニングから始めました。経験の有無にかかわらず皆非常に熱心で、手縫いのパッチワークの手法もすぐに習得しました。

8月にはジャフナで最も有名なヒンドゥー寺院、ナツルール寺院でお祭が行われ、サリー・コネクションも出店し



タンニムリプ村での研修風景

て商品の宣伝、サリー寄付の呼びかけをしました。各村の女性たちが1日ずつ店番を担当し、タンニムリプ村からは14人が参加。タンニムリプ村は市街地へのアクセスが悪く、女性たちの活動範囲も限られていたため、ジャフナに

来ることで体が初めてだったというメンバーも多く、初めての都会の雰囲気を楽しんでいました。

現在、タンニムリプ村の女性たちも含めて、約70人の女性たちがサリー事業に参加しています。商品の販売網を広げるため、9月にはスタッフがドイツ、スイスに営業に行き、サリー商品をフェアトレード店や雑貨店に紹介しました。お店からの反応は良く、早速商品を買ってくれた店が4店、またドイツのフェアトレード市場に商品を紹介することに前向きになってきている団体もあります。これから事業終了までの半年間に、安定した取引先を増やせるよう取り組んでいます。

(伊藤文)

ぜひ応援をお願いいたします!

Sari Connection facebookページ
<http://www.facebook.com/SariConnection>

■ムライティブ県 淡水池での養殖および漁協の強化事業終了

スリランカ北部ムライティブ県で、内陸部の淡水池で漁業を営む漁民を対象に、資源管理の技術習得や漁協の強化によって漁民の生活が安定することを目指して事業を実施しています。

昨年11月から始まったムライティブ県での淡水池での養殖および漁協の強化事業も今年12月でいよいよ終了です。

主な活動として、池に生簀を設置して稚魚を一定の大きさまで育てて池に放流する中間育成などの研修を行ってきました。漁をして即座に現金収入につながる漁民にとって、1日3回エサを与えて稚魚を育成することは、新しい試みでハードルが高かったようです。それでも、生簀に近づくと稚魚がエサを求めて集まり稚魚の成長を間近に見られるので、単純な稚魚放流とは違い、漁獲物を育てる喜びや利点も少しは肌で感じられたのではないかと思います。そして、生簀で育てた稚魚は大きくなり、いよいよ漁獲の時期を迎えました。

スリランカ北部はこれから雨期に入ります。「雨が落ち着いたら稚魚の育成をしていきたい」と言っている漁協もあり、将来、漁協自らの資金で中間育成を定期的に実施して、生活の安定につながられる兆しがみえます。

また、漁協強化の一環として様々な研修を行った中で、パソコン研修が一番人気でした。スキル習得にとどまることな



テニヤンクラム漁協でパソコン研修を真剣に受ける漁民

く漁民の自己肯定につながり、研修中に漁民の表情が明るくなっていく様子を見て、職業や年齢にとらわれることなく学習機会の提供も重要なことだと実感しました。

本事業は皆様のご支援あって実施できました。この場を借りて心よりお礼申し上げます。ありがとうございました。

(飯田彰)

(この事業は日本NGO連携無償資金協力の助成と、皆様からのご寄付で実施しています。)

**東ティモール
コーヒー、
過去15年で
最も不作の年**

今年のアラビカコーヒーの収穫量が少ない年でした。異常気象の影響もあり昨

年比で5割減、過去15年で最も不作になるだろう、とコーヒー関係者は予想していました。残念ながら予想は的中、結果パルシックに集まったコーヒーは生豆で18トン、昨年比8割減でした。



コーヒーの木についている実もまばら

マウベシコーヒー生産者協同組合（COCA MAU）では、長雨のため例年より2か月も遅い7月末からのコーヒー収穫でした。収量が大幅減となった理由は、昨年10月、花がついた後に雨が降らず、豆が赤く熟す5月に雨が多く降り、熟さないまま落果した実が多かった、などです。その根底にコーヒーの木の老朽化による実のつき具合の減少があり、この対策に一刻も早く取り組む必要性を実感しました。

一方、ロブスタコーヒーは大豊作。昨年、生豆で8トンだったところ今年は40トン強。収量の大幅な上下動はいずれにしても生産者にとって不利です。品質向上と収量の安定化が課題です。

（伊藤 淳子）

**スリランカ南部 洪水・
土砂崩れ緊急支援事業**

今年5月末、スリランカ南部広域において豪雨による洪水、土砂崩れ被害が発生しました。スリランカでは近年、毎年のように集中豪雨による災害が起きていますが、今回は地域も広く被災者数も死者と行方不明者合わせて300名を超える大規模なものでした。パルシックが支援している有機紅茶栽培農家グループ「エクサ」の活動地域デニヤヤでも、洪水と土砂崩れによる道路の分断や、家屋損壊被害が出ました。デニヤヤ事務所では周辺の被災者を対象に、被害発生直後に緊急支援として食料と生活必需品を配布しました。その後6月に入って状況が落ち着いてからは寝具の配布、子供たちに学用品の配布を実施し、6月末からは洪水と土砂崩れによって損壊した家屋の修復支援を開始しました。10月初めに167世帯の修復を終えました。



台所を再建している様子

（この事業は皆様からのご寄付とジャパンプラットフォームからの助成で実施しました。）

マレーシア ペナンでの教育事業を拡充

2015年夏から毎年、日本の大学生や高校生がペナンで多文化共生や環境保全について学ぶ教育事業を実施しています。今年で3度目となり、この夏は11人の高校生が6日間、12人の大学生が24日間ペナンに滞在し、同年代のマレーシアの若者と交流したり、漁民組織PIFWA（ペナン沿岸漁民福利協会）の指導のもとマングローブ植林を体験したりと、様々な体験をしました。

これまでの大学生のプログラムは、ペナンの大学の語学コースで英語を学び、植林やパームオイル・プランテーションの訪問などの週末プログラムをパルシックが計画・手配していましたが、大きく変えて、英語教育も含めて3週間のプログラム全体をパルシックで独自に企画・手配するものになりました。英語プログラムは、グループに分かれてマレーシア人の先生とペナンの町を歩き、市場の人に話しかけたり、モスクや博物館で解説を聞いたり、英語を学びながら多文化社会ペナンを知ることが出来る内容で、学生は積極的に参加。英語プログラム以外に特に好評だったのは漁村でのホームステイ体験でした。イスラム教という異文化のマレー人家族と日夜生活を共にできたこと、言葉が通じなくても家族から



漁村でマレー人の民族衣装を着せてもらった12人の学生

温かくもてなされたのが忘れられない体験となった、とのことでした。

この冬には、大学院生が1週間漁村にホームステイして調査するプログラムを計画中です。ペナンという多文化が共生する町で、異文化や多文化を肌で感じながら学ぶことが、日本の若者の世界観や価値観を広げることにつながればと願い、取り組んでいます。

（西森 光子）

（PIFWAの植林事業は、イオン環境財団の助成と皆様からのご寄付で実施しています。）

パルシックは、対等な交易を通じて、人と人のつながりと信頼を広げていくことが紛争の抑制、平和の形成に寄与すると考えています。

**「アールグレイ紅茶」有機認証取得、
「ルフナ紅茶」も新登場**

◆アールグレイ紅茶 ついに有機 JAS 認証取得！

2011年よりスリランカ南部デニヤヤで、小規模の紅茶農家さんたちが紅茶の有機転換に挑戦してきました。有機転換中は、雑草抜きや有機肥料の施肥などの農作業が増えるうえに、化学肥料の使用をやめることにより、一時的に茶葉の生産量も落ちてしまいます。まだ有機商品ではないので、高価格で紅茶は売れず、農家さんたちにとっては困難な状況です。

それでも「健康には変えられない」「子どもが安心して庭で遊べるように挑戦したい」という農家さんたちの気持ちに応え、パルシックはこれまでその過程を、堆肥づくりのための牛の配布や、有機栽培の研修実施などで支えてきました。中でも大切なのは購入して支えること——多くのお客様が「有機転換中」の紅茶を買い続けて下さったことで叶い、今回の有機認証取得につながりました。改めまして、皆様に心より感謝いたします。

これを機にパッケージもリニューアルしました。コンパクトな箱型になり、内容量はそのままでも価格が750円⇒700円(税抜)と、よりお手頃。ほんのり甘いコクと爽やかな柑橘の香りが人気のアールグレイ紅茶です。

◆コクと甘味のルフナ紅茶 新登場

アールグレイ紅茶の原料に使用しているルフナ紅茶。紅茶好きのお客様さま達からの「ルフナ紅茶をストレートでも楽しみたい」という声にお応えし、この度、商品化しました！日本ではまだまだ知名度の低いルフナ紅茶ですが、実はスリランカ紅茶局が運営するティーオークションで、最も高い値をつけています。コクと優しい甘味が特長で、ミルクティーにしたり、黒糖などの癖のあるお砂糖にもぴったりです。また、まろやかな味わいなので、幅広い分野のお食事のお供にも適しています。ぜひお試しください！



有機アールグレイ紅茶
有機ルフナ紅茶

ティーバッグ	2g × 25個	各 700円(税別)
リーフ	100g 入り	

混植栽培の茶畑と農家のお母さん





産地からのメッセージを商品に同封しています。

2017年夏から季節ごとに産地からのメッセージをお届けする「フェアトレードの風」便りをはじめました。パルマルシェ（パルシックオンラインショップ）やお電話で直接ご注文いただいた方へ、商品に同封して発送しています。

記念すべき第1号は東ティモールで8年間ハーブづくり事業を担当しているアンジェリーナさん。商品ご注文の際は、便りをお楽しみに！

ちょっと寄り道♪

美味しいお店

東京都練馬区の個人商店が続く小さな通りの先に、中庭に木が揺れる素朴な構えのお店があります。「おいしいは、しあわせ」を合言葉に、素材にこだわったお菓子を販売される「かすたねっと」さん。何を食べてもひとくちで笑みがこぼれるような、とびきりのお菓子をつくっているのは、知的ハンディキャップのある菓子職人の皆さんです。まわりの人にどんどんお勧めしたくなるお店です。お菓子は、オンラインショップで購入もできます。



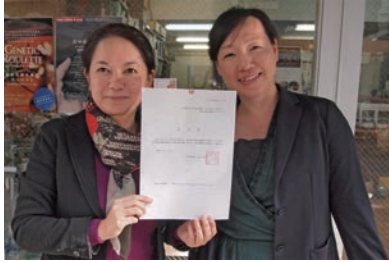
店長の矢吹良子さん

手づくり焼き菓子かすたねっと
 〒176-0001 東京都練馬区練馬 2-1-9
 ■定休日：木曜・日曜・祝日 ■営業時間：9時～18時
 ■Tel：03-3948-1640 ■Web：http://casta.jp/

認定NPO法人格を取得しました！

～認定NPO法人申請・取得顛末記～

2017年11月1日に認定NPO法人格を取得し、パルシックへのご寄付が寄付金控除を受けられるようになり、ご支援いただきやすい環境が整いました。



東京都から認定書を受領しました

認定NPOへの申請を決定したのは2016年初のこと。申請に必要な寄付者名簿の作成に取り掛かったところ、過去数年間の多忙の中で気づかないままになっていた他の申請書類の不備を次々と発見；)。もろもろ修正に追われました。

準備は数か月におよび、東京都によるパルシック東京事務所での書類調査前日の夕方。ついに迎える勝負の日に備えて、スタッフ数名で確認しながら、翌日の審査に必要な会計や助成金の証憑ファイルを並べていったら……審査対象期間なのに倉庫に預けてしまっているファイルがあることを発見！しばらく凍り付きました……。それから東京事務所が丸一となって、倉庫に配送をお願いしたらギリギリ間に合わせられるのか確認したり、ちょうど一時帰国中だった駐在員が横浜の倉庫まで朝一番に取りに行くことを提案してくれたり、なんとか対応して乗り切ることができました。

1973年に設立、2002年にNPO法人として認証、という歴史ある団体パルクからつながるパルシック。この長い歴史ゆえの膨大な書類との格闘の末、無事に認定NPO法人格の取得に至りました。ご協力いただいた皆様、ありがとうございました！ (ロパーツ、西森)

個人によるご寄付で受けられる控除について

パルシックは、2017年11月1日に東京都より認定NPO法人として認定されました。これにより、パルシックへのご寄付、募金は、確定申告によって所得税、法人税、相続税などの寄付金控除を受けることが出来ます。

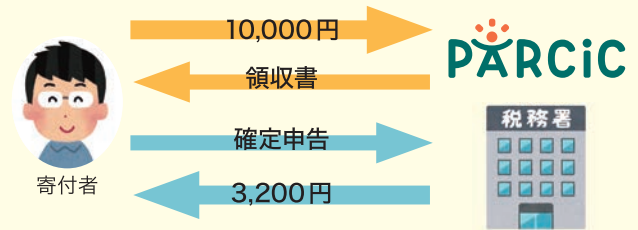
※確定申告には2017年11月1日以降のパルシック発行の領収書が必要です。

〈所得税の場合〉

確定申告をすると、寄付金額合計の40%の税金の還付を受けることが出来ます。所得税の控除は、税額控除、所得控除から有利な方を選ぶことができます。多くの場合は、税額控除を選択するほうがより多くの金額が控除されます。

例えば
税額控除を受けると

1万円のご寄付で、
3,200円の所得税の還付を受けられます。



(年間の寄付金合計額 - 2,000円) × 40%

都道府県または市区町村が条例で指定した認定NPO法人等に寄付した場合、個人住民税の計算において、最大10% (都道府県民税4% + 市町村住民税6%) の寄付金税額控除が適用されます。詳しくは、皆様がお住まいの自治体にお問い合わせください。

皆さまのご支援によって支えられています

パルシック会員募集

パルシックの趣旨に賛同し、総会等を通じてパルシックの活動に参加していただける会員、賛助会員を募集しています。

年会費 会員：10,000円
賛助会員：20,000円

入会ご希望の方は、電話、メールで下記東京事務所までお問い合わせください。



寄付のお願い

あなたの寄付で、パルシックの活動を支えてください。事業地を指定してご寄付いただくこともできます。みなさまからのご寄付をお待ちしています。

●クレジットカードでの寄付

Webサイトよりクレジットカードでのご寄付を承っております。
<http://www.parcic.org/donation/donate/>

●郵便局からの寄付

郵便振替口座：00140-8-536957
口座名：パルシック

●銀行からの寄付

三井住友銀行 神田支店(普) 2384136
口座名義：特定非営利活動法人パルシック

※銀行からお振り込みの際は、必ずご住所とお名前をFAX、メールなどでご一報ください。



クレジットカード寄付QRコード